

未来を生きる君たちへ

I N A B E T T E R W O R L D

子供たちと世界の問題を描いた話題作『未来を生きる君たちへ』。母親であり、国際協力に取り組む原田さんが映画を観た感想を独自の視点で語ってくれました。



(C)Zentropa Entertainments16

子供の世界と発展途上国を舞台に 復讐の連鎖と赦しを描く――

学校でイジメにあう10歳のエリアスは、医師としてアフリカの難民キャンプに赴任している父親アントンが心の支えだ。ある日、エリアスのクラスに最近母親を亡くしたクリスチャンが転入してきた。クリスチャンの“予期せぬ襲撃”でイジメから逃れたエリアスは、彼と急接近し、友情を育む。

一方、アントンは離婚問題を抱え、また難民キャンプに連日運ばれて来る、凄まじい傷を負った患者に心を痛めていた。

エリアスやその家族が直面するイジメや夫婦不和というパーソナルな問題から、世界のどこかで起きている民族紛争や内戦というグローバルな問題までを浮き彫りにし、それぞれが復讐と赦しの狭間で揺れ動く様を描いた感動作。

『未来を生きる君たちへ』にはサスペンス以上の恐怖がありました。子ども達の周りには様々な危険が潜んでいます。思わぬところから静かに忍び寄り負の連鎖に胸がぎゅっと苦しくなりました。親は子どもを育てて、社会に返す責任があると思うんです。この映画の親たちも、子どもを愛する良い親です。なのに何かがずれてしまうと、誰かを傷つけるような、取り返しのつかない事を子どもはやらかしてしまう可能性があるのです。怖かったです。クリスチャンは、ガンの母親を救えなかった父親に対する怒りを心に仕舞い込んでいたためにとんでもない行動に出てしまいます。イジメられっ子のエリアスも、クリスチャンと仲良くしたかっただけなのに、それが犯罪へと繋がってしまいました。

エリアスのお父さんはアフリカの紛争地域で医療活動に従事している立派な医者。でも家に帰れば一人のお父さん。子どもにとってはいつでもそばにいて欲しい、かけがえのない自分だけのお父さん。世界で弱い立場で困っている人達を助ける事は素晴らしい事。でも子どもは素晴らしいお父さんであるよりも、ただそばにいて欲しかった

だけ。皮肉な現実に胸が苦しかったですね。ガラス細工のように繊細な子どもの気持ちを大人がいつでも100%理解しようと思うより、子どものすべてを受け入れ包み込んで、ただそばにいてあげて、子どもがいつでも安心していられる環境であること、それが大事なかなって気づかされます。



途上国の子どもも先進国の子どもも みんな必死で生きています

私は国際協力機構JICA中部のオフィシャル・サポーターとしてアフリカやアジアの途上国へ出かけます。そのときに感じたことがまさにこの映画のテーマでもありました。先進国の私たちは支援の立場で現地を訪問しますが、ボロボロの服に裸足で走り回るアフリカの子ども達からは学ぶことだらけなことに気づかされます。物質的には貧しいけれどもキラキラした瞳で逞しく生き抜いて

いる豊かな生きざまが羨ましくて、逆に物質的には満たされてるけど、もしかしたらそれが邪魔をして、生き抜く力が弱くなっている日本の子ども達のことを思うと不憫で、母親としてはあまりに悲しく、何とかしなければと思うのです。

映画では満たされた環境の先進国(デンマーク)の子ども達と、貧しいアフリカの途上国の子ども達が対照的に映し出されるのですが、恐ろしい問題を起こしたのは先進国の子ども達。先進国の子ども達は複雑な家庭環境・ストレス社会の中で誰もが些細な問題を抱えながら必死で生きています。現代の都会で生きる子ども達もまた、生き抜くことに苦悩しているのです。そんな先進国の未来への問題解決のヒントは、途上国にあるように思います。厳しい環境で助け合って生きている途上国には私たちが失ってしまった大事なことがあります。『未来を生きる君たちへ』、過去を恨みあうのではなく、謙虚な心で今を見て、ちっぽけな自分の殻から未来へ飛び出して、みんなと手をつないでほしい……そんなメッセージと私は受け止めました。



子どものすべてを受け入れ包み込み ただそばにいてあげること

タレント／エシカル・コーディネーター 原田 さとみさん

【プロフィール】
はらだ・さとみ／タレント。JICA中部なごや地球ひろばオフィシャル・サポーターとして、昨年はエチオピアとルワンダ、今年はラオスに渡航。(財)地球環境財団・エシカルJAPAN中部地域代表としても活躍。